

ヒトの形態は、その長い進化の過程を経ているので、原始的な生物の特徴を引きずっている。たとえば、からだに前と後ろがある、左右対称であるなどを挙げることができる。脊索動物門としての特徴もある。よく言われるヒトの特徴としては、直立二足歩行、器用な手、両眼視と大きな脳の四つが主なものであろう。我々は直立二足歩行の始まりをもってヒトの仲間と認める。つまり、人類と類人猿との違いは何か、という問いに対する人類学者の答えは、「直立二足歩行をするか、しないか」である。ヒトでは、広く低い骨盤、そして、関節する大腿骨の傾きが強くなる。さらに、腰椎の前方への彎曲が出てきて、頭蓋が脊柱の真上に来る。このような骨格の特徴をもって、直立二足歩行と断定する。

骨盤の形態についてみる。ヒトの腸骨の特徴は、まず、その高さの減少にある。その結果、仙腸関節が股関節に近くなり、腸骨にかかるストレスが、少なくなっている。さらに、腸骨翼がカーブする。この結果、中殿筋と小殿筋が外転筋として働くようになり、二足歩行には必須のものとなる。下前腸骨棘が発達し、大腿直筋が付くようになる。直立二足歩行という運動のために、骨盤やそれに伴う筋は著しく変化した。それほど大変なことだったのである。さらに、ヒトの胎児は脳が発達し、頭が大きい。しかし、直立二足歩行を行うので、骨盤の大きさには制限が加えられることになった。そこで、短い腸骨に加え、仙骨を下げて、産道の後壁とするように進化したのである。ここで、大坐骨切痕が出来上がる。旧人（ネアンデルタール人）の骨盤も現代人とは、いくらか違う。恥骨上枝が長く、上下に扁平である。この結果、骨盤入口の前後径が大きくなっている。この原因として、妊娠期間延長説、大きい頭と低身長説、異なる歩行様式説など、諸説紛々である。

現生の新生児の頭の大きさが骨盤の大きさに規定されることから、新生児の脳は成人よりはるかに小さい。この成長の遅れが与えた影響は、保育期間の延長である。チンパンジーの場合、6歳で思春期を迎えるが、ヒトでは12歳である。6年の期間延長がある。ただし、12歳で大人になるわけではないのは、周知のことである。

話は変わるが、沖縄ではたくさんの化石人骨が見つかっている。とくに、那覇市山下町で見つかった子どもの骨は日本列島では最も古いとされていて、年代は約3万2千年前である。また、八重瀬町（旧具志頭村）港川で発見された約1万7千年前のほぼ完全な人骨は、東アジアを代表するほどの化石になっている。

縄文時代は、1万年以上も前から始まる、土器を持つ採集狩猟文化である。沖縄の縄文時代人は、目と目の間が平たいという特徴が見つかっている。さらに、成人男性の平均身長が約153cmと、低身長でもある。縄文時代人は全国的に見ても約157cmと身長が低いが、南低北高の傾向がはっきりみえることが分かった。